

公共図書館における音環境の実態調査 —図書館利用者の館内の音に対する意識に着目して—

伊川 真以

今日、公共空間における音環境への関心が高まり、その実態や音環境の基本的な在り方が論じられている。公共図書館の現状では、一部は他の施設との複合化が進み、環境 BGM を導入するなど、従来よりも賑やかな環境が登場しつつある。一方で、「図書館は静かな場所である」という認識も根強いいため、利用者から音に関するクレームが後を絶たず、環境 BGM に対する批判も存在する。現在の公共図書館の音環境は過渡期にあると言えよう。また公共図書館における音環境に関する先行研究は少ないが、加藤修子の「公立図書館のサウンド・スケープデザイン」という一連の研究が挙げられる。

以上の背景、先行研究及び関連研究を踏まえた上で、公共図書館において利用者が館内で発生しているどのような音に対してうるさい、または気になると感じるのかを明らかにすることを目的とする。

そのため本研究では図書館利用者がどのような音に対して不快に感じるのかを把握するために音響心理学アプローチによる実験をした。本実験は 2015 年 12 月 12 日(土)と 12 月 16 日(水)の 2 回にわたり実施した。対象者は、12 名(男性 6 名、女性 6 名)であり、大学生及び大学院生を対象とした。本実験では館内を 3 つに分け、それぞれのエリア毎に実験協力者 20 分間の読書をしながら、スマートフォンアプリを使用してもらい館内で発生したうるさい、または気になる音が出現した時間を記録してもらおうという形式をとった。また実験前と実験後に実験参加者に対して、属性や図書館の音環境への意識について等の項目を設けた質問紙調査を実施した。

実験の結果として①図書館利用者が特に不快に感じる音は「図書館利用者(子ども)の声」、
「物音」、
「図書館利用者(大人)の声」であること、②図書館利用者が感じる騒音の不快感に関しては、性別の違いは関係がないということ、③物理的な音の性質と図書館利用者が感じる音すなわち人間の知覚を通して得られた音には違いがあるということ、④公共図書館の望ましい音環境として、「静かな環境」を望む人よりも、「ある程度音がある環境」を公共図書館の音環境にとって望ましいとしていたことを明らかにすることができた。

今回の実験で、図書館利用者がどのような音に対してうるさい、または気になると感じるのかについて一部を明らかにすることができた。しかし、公共図書館の音環境の実態を明らかにするには不十分であり、さらなる実験や調査が必要である。全国の公共図書館を視野に入れ、図書館職員が音環境に対してどのような意識を持っているのか、また公共図書館の利用者から寄せられるクレームにはどのようなものがあるのか、音環境に関する問題点はそもそも存在しているのか等について明らかにすべきである。

(指導教員 逸村 裕)